報告　『スラヴ文化研究』Vol.21（2023）pp. 46–50

参加記「JCREES スラブ・ユーラシア研究サマースクール」

横山綾香

本イベントは北海道大学で 2023 年 8 月 24 日・25 日に開催され、日本全国からスラブ・ユーラシア地域について学んでいる学生 21 名が参加した。内訳は学部 3、4 年生が半数、修士課程大学院生と博士課程大学院生がそれぞれ 4 分の 1 で、専攻分野は文学、言語学、歴史学、文化人類学、政治学など多岐にわたる。報告者も参加者の 1 人であった。

プログラムの構成は、2 日間ともに午前中は JCREES 加盟団体および北大スラブ・ユーラシア研究センターの代表者による講義、午後は学生による研究発表となっている。また、大学院生はサマースクールが開催される 2 日間に加えて、資料収集等のために滞在期間の延長が可能である。

〈講義概要〉

◆大西郁夫（北海道大学名誉教授・文学）

「『オブローモフ』を「読む」：テクストから少し離れて」

文学の言葉は論理的に読み取れる内容を超えて、意味が成立する場合もある。受容美学の考え方では、テクスト全体を読んで読者に生まれてくるものも文学の意味に含まれる。今回は、ゴンチャロフの『オブローモフ』（1859）を一般的な精読とは反対に「大まかに」に読んでいった。

テクストの細部を捉えた場合の解釈は、主人公の特性を「怠惰と無気力」とし、その存在を農奴制の帰結とみなす解釈と、対照的に本質を純粋さとして、功利主義への批判とみなす解釈に大きく二分される。

しかし、バフチンのクロノトポス論を元にテクスト全体を見てみると、近代化の進むペテルブルクと故郷のオブローモフカ村の中間点であるペテルブルク郊外に留まるという結末から、進歩を拒否しながらも過去に戻ることのできない主人公の姿が浮かび上がる。

作者ゴンチャロフは穏健な西欧派であったが、西欧先進国の功利主義に反発するなど、近代化の向かう先に違和感を抱いていた。一方で、開国交渉のために来日した際には近代化に参加しない日本に対して批判的な記録を残している。オブローモフの結末は作者

横山綾香：東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス（CC-BY）下に提供します。
https:creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

自身の近代化に対する煮えきれない態度の反映と言える。

◆神原ゆうこ（北九州市立大学・文化人類学）

「マイノリティにとっての体制転換とその後:スロヴァキアを事例として」

1989 年のチェコスロヴァキアの体制転換において、スロヴァキアの反体制派の印象は薄いが、80 年代後半には環境活動家や宗教家が活動を進めていた。89 年 11 月に発生したプラハの学生デモに呼応する形で、スロヴァキア各地でも抗議活動が広がったが、村落の動きは都市部と比較して鈍かった。なぜならば、当時の村落部住民は社会主義体制に大きな不満はなかったためである。

しかし、ハンガリー系住民の多くは村落部に居住しているにもかかわらず、体制転換に賛同する傾向が見られた。その背景として、当局から民族主義者と疑われて監視対象になりやすかったことと、スロヴァキアより先に民主化を進めていたハンガリーの状況を知る者が多かったという事情が存在する。

ハンガリー系の他に、主に東方典礼カトリックを信仰するルシン系民族も少数民族として知られている。社会主義時代にはルシン系は「ウクライナ系」と見なされ、ローマ・カトリックと異なり、教会の存続も認められないなど、苦しい立場に置かれていた。彼らの地位は民主化後に回復したが、体制転換期の動きが見えづらい。「チェコスロヴァキアの体制転換」の一般的なイメージとスロヴァキアで暮らすマイノリティの経験は必ずしも一致せず、また各マイノリティの間でも異なる。

◆大平陽一（天理大学・文化）

「ロスマンのグラフィックデザイン:戦間期ブルノの機能主義」

ズデニェク・ロスマン（1905～1984）は、チェコの建築家・デザイナーで、ブルノとブラチスラヴァを拠点に活動した。元々は建築を学んでいたが、1924 年にチェコ・アバンギャルドの中心的グループ「デヴェットシル」ブルノ支部の創立に関わり、この団体の冊子や論集のブックデザインを手掛けた。当時の作品は表題や見出しが太いサンセリフ体、本文が細めのセリフ体で、両者ともすべて小文字で組まれていた。このスタイルはバウハウスで考案されたニュータイポグラフィの要請を忠実に踏襲している。

1930 年代に入ると、グラフィックデザインの世界にフォトモンタージュの波が押し寄せる。しかし、写真には「あまりにも多くを見せすぎることで、明晰さから遠ざかる」という欠点があり、「被写体全体の特徴を示す部分だけを撮る」べきと、ロスマンは持論

を展開していた。1930 年代半ばの作品では、片目をクローズアップした写真が表紙に用いられている。

その後も正確かつ迅速な伝達を最優先事項とする機能主義な理論を主張し続けたが、次第に手書き風のスクリプト体や多色刷りなど、ニュータイポグラフィが排除した装飾性が見られるようになった。

◆村上智見（北海道大学・考古学）

「発掘調査によるシルクロード研究の最前線：ユーラシアの文化交流とソグド人」

中国の唐代に西域（タリム盆地諸国、後に中央アジア、南アジア、西アジアの一部まで含まれた）文化が大流行し、周辺諸国にも影響を与えた。日本でも法隆寺や正倉院宝物など、唐を介して伝わった「西域風」の物品が見られる。西域からそのまま伝わったものと中国で生産されたものがあるが、製作地の特定は難しい。

西域文化を東に運んだ担い手がソグド人である。彼らはゾロアスター教を信仰し、中央アジアのソグディアナ（現ウズベキスタンとタジキスタンの一部）を拠点に、シルクロード交易を担った。彼らの遺跡はサマルカンド郊外に残されており、日本の研究チームはウズベキスタン現地の研究者と共同して発掘を進めている。ゾロアスター教の木彫板、貨幣、装身具類、土器、人骨、建築材など木製部材、食料（穀物・豆・にんにく・アプリコットの種）などが出土し、彼らの衣食住が明らかになりつつある。

ゾロアスター教の木彫板には中心的な女神ナナが描かれているが、2 本腕のナナと 4 本腕のナナが見られる。2 本腕のほうが古い様式で、4 本腕はインド方面の影響を受けたものだと考えられている。また、中国の後漢で作られた鏡が 7～8 世紀の遺構から発見されるなど、ペルシャのみならず、インド、中国、突厥といった他地域と関わりも見えてきている。

◆上垣彰（西南学院大学名誉教授・経済）

「プーチン戦時経済体制はどのような性格をもつ経済体制か：ナチス戦時経済との比較」

ドイツはヴェルサイユ条約により軍備制限と多額の賠償金支払い義務を負ったが、1933 年にナチスが政権を奪取して、わずか 6 年後に開戦に踏み切っている。再軍備に向けた資金調達は、賠償金減額に成功した帝国銀行総裁シャフトの非凡な手腕によるところが大きい。また、私的企業の自由度は高かった一方で、過剰資本に悩んできた大企業は再軍備に協力的であった。

太平洋戦争中の日本とは対照的に、ナチス政権は体制の動揺を恐れ、開戦後も国民の生活水準の維持を重要視した。実際に戦況が急激に悪化するまで生活水準が大きく低下することはなかった。それを可能したのはユダヤ人や連行されたソ連人・ポーランド人などの強制労働である。

プーチン体制はプーチンを中心とする利権集団の利害が国家機能に浸透していて、それを維持・拡大しようとする力が強く働いている。現在、トップ 20 社のうち 12 社が国有企業である。

ナチスは 6 年かけて計画的に戦費を確保したが、プーチン政権のこれまでの経済政策にはそうした兆候は見られない。ロシアの経常収支は、2022 年に欧米の経済制裁による輸入の急減で大幅な黒字となったが、2023 年は急減している。しかし、生活水準の著しい低下はまだ起きていない。

◆中嶋毅（東京都立大学・歴史）

「在外ロシア史研究と史料：ハルビンツィの事例から」

1917 年の 10 月革命をきっかけにソヴィエト政権に反対する人々の国外脱出が始まった。その後、ロシア内戦で反共産党勢力が敗北したことにより大量のロシア人「難民」が発生し、各地で独自の「亡命ロシア世界」を形成するようになった。亡命の背景は多様で、第一次世界大戦の捕虜や旧ロシア帝国から離脱した国家に居住していたロシア人も含まれる。教育水準は革命前ロシアの標準より高いと推測されるが、亡命者の多数を占めたのはカザークと東欧の農民であった。「亡命ロシア人＝貴族・知識人」というイメージと実態は異なっている。

亡命コミュニティでは、大量のロシア語出版物が登場した。主要なものとして、プラハ発の論文集『道標の転換』（1924）やベルリンで発行された新聞『前夜』が挙げられるが、ソ連でも購入可能で、ソヴィエト権力にも少なからず影響を与えていた。また、帰国を前提とした子女教育も行われた。しかし、欧米では同化が早くに進んだ結果、30 年代には亡命ロシア人向けの教育施設は見られなくなった。

亡命ロシア人コミュニティのなかでも異色の存在であったのがハルビンである。1898 年に中東鉄道（後の東清鉄道）の拠点として開発され、革命前からロシア人コミュニティが存在した。1924 年に中東鉄道が中ソ合弁企業化してからは、亡命ロシア人とソ連国籍者が共存し、満州国期に至っても「ハルビンツィ」（ハルビン・ロシア人）として自立した世界を維持していた。

〈参加者の様子〉

研究発表は学部生も院生も持ち時間 20 分・質問時間 10 分という学会と同様のスタイルで行われた。これまでの研究生活で聞く機会のなかった内容が大半で、発表者の学年に関係なく、どの発表も大変勉強になったと感じている。印象に残っている点は、学部生で漫画『ゴールデンカムイ』に関連した発表が複数出たことで、スラブ・ユーラシアへの関心の入り口として大きな存在であることを実感した。

学生間の交流も大変な盛り上がりを見せた。第 2 外国語でロシア語を選択する学生やスラブ・ユーラシア地域について研究する学生は「少数派」で、所属する大学では語り合える仲間がいないと感じている参加者も多く、懇親会では思う存分スラブ・ユーラシアトークに花を咲かせていた。また、この夏に中央アジアや中央ヨーロッパに渡航した参加者も何人かいて、海外渡航を考えている参加者と情報交換している様子も見られた。

参加者全員が研究発表を行うサマースクールであるため、学部生でも「研究をすること」自体に意欲の高い者が集まっていた。逆風が吹き止みそうにないスラブ・ユーラシア研究であるが、まだまだ熱心な学生が日本各地にいるという事実に大変励まされる結果となった。